

## 戦後の横浜中華街の不管地性

森 勝彦

## はじめに

現在の横浜中華街は特異なチャイナタウンである。日本人、外国人観光客向けに、飲食からアミューズメントに至るまで徹底的に中国文化を前面に押し出した観光街となっている。そのきっかけとなったのは、1955年に行われた中華街大通りの西側入口に中華街のシンボルとなる牌樓の設置である。横浜市側からの働きかけを受けて中華街側では議論を重ねて、中国文化をメインとした町づくりを行い入口に中日友好を意味する善隣門を建て「南京町」から「中華街」と呼称を変えることとなった。善隣門には「中華街」と書かれた扁額が掲げられた。これ以降、従来までの「南京町」に代わって「中華街」という呼び名が定着した。この背景には、中華街が終戦後から朝鮮戦争時期にかけて外人バーを中心に歓楽街化したのが朝鮮戦争の休戦とともに進駐軍関係の需要減が顕著となったことなどがあり、中華街の未来を憂慮した一部の華僑たちも、中華街の新たな街づくりを模索し始めた。戦後の「南京町」時代を完全に否定しネガフィルムを反転させた姿が現在の中華街となっている。

この戦後の「南京町」時代については、華僑華人側、横浜市側、及び中華街に関する多くの研究書、概説書、論文は、否定されるべき時期として多く語ることはない。しかし1つの街のあり方の評価については、その街が置かれた当時の経済、社会、政治環境の中で行うべきである。またその時期の「南京町」の特徴には、伝統中国、近代中国において行政境界や管理が入り乱れた場所に多く形成された不管地的要素があったのかについてもふれる必要がある。中華世界に広く分布するチャイナタウンは、一般的なエスニックタウンと比較しても同郷、同業、同宗の団結が強く外部の管理が困難な状況を示す場合があるとみられるからである。

当時の「南京町」時代の中華街はどのような実態であったのか、不管地的状況はあったのか、その背景は何か、どのように評価すべきかなどについて当時の新聞記事や住民の証言を中心にみてみたい。なお1955年以前を「南京町」、以後を「中華街」とするのが本来的には正しいが、当時の新聞記事や資料などには、区別されずに使われている例も多く、ここでは原文の通りに引用するほかは基本的には「中華街」とする。

---

キーワード：不管地、GHQ、外人バー、コンテナ化、環境への対応

## 1. 終戦直後の中華街

空襲で焼け野原になった中華街を含む横浜中心部で終戦直後に始まったのが進駐軍による接收である。進駐軍の司令官マッカーサーは山下公園に面したホテルニューグランドを宿泊地とし、第8軍の司令部は横浜税関に置かれた。以後、横浜の中心部の主要な建物、施設、土地が次々と接收され、横浜市内では1,600ヘクタール、全国の接收面積の約62%を占め、中区の約35%が接收された。図1は1951年における横浜中心部の接收の状況である。港湾地区、中区の市街地の大部分の他、明治の開港以来、欧米人の住宅地となっていた山手も洋館住宅地を中心に接收された。「戦勝国民」が居住する中華街は接收をまぬかれ、結果として進駐軍の接收地域に取り囲まれることとなった。当時の横浜中心部は、「リトルアメリカ」とでもいうべき状況にあり、アメリカとの関係なしにはすべてが機能しない環境にあった。

この時期の中華街については

「当時の中華街（とはいわなかったが）は治外法権のめちゃくちゃな街で、それこそカネさえだせばなんでも買えた。あらゆる物資が不足していた時代なのに中華街だけは特別で、いわば地域全体が闇市といっても見当はずれではないところだったのだ。」<sup>1</sup>

とあるように「治外法権」的な状況であったとする証言が多い。当時の状況を『神奈川新聞』1946年1月14日号に「国際色に賑わふハマの南京街」として

「ハマの南京町—それは戦前からの特異の存在として親しまれてきたが、いま終戦後、この街は戦前にも劣らぬ繁栄をみせてゐる。……元も子もなくした灰じんの中から、而も連合国人として今は完全に分離された中国人たちが不屈の意欲に燃えて築くその復興ぶり、そこには統制のわく外が如何なるものなのかを示さするとともに、彼等民族特有の粘りと団結の力を遺憾なく示してゐるのだ。出来たてのやきめし、天どん、中華そば、さては甘いおしるこに中華まんじゅう迄、油、香り鼻をつく店先に立つは愛児を背負った母親、家族連れのお紳士など、彼等は週に一度や二度はその栄養補給に必ずこの街を訪れると云ふ。」

とあるように、戦勝国民となった中国人が、治外法権的立場のなかで、同郷、同業などの自らの団結力を基盤に、連合国から優先的に配布される食料、雑貨などを元に料理業を繁栄させていた。中華街（山下町）に来れば食料はなんでもあった。

「GHQからのいわゆる特配という華僑あての特別配給で、家族はずいぶんと助けられた。食べるというだけじゃなく、商売の材料としても使ったの。それに親父はGHQのキャンプでコックもしてたから、砂糖、油、缶詰という具合にそこでも材料をもらってきたんだよね、それでここに家を建てられたわけ。」<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 佐野美津男「振り向けば中華街」『中華街8月号』（1974）

<sup>2</sup> 村上全一「横浜中華街の華僑伝」新風社（1997）p.99

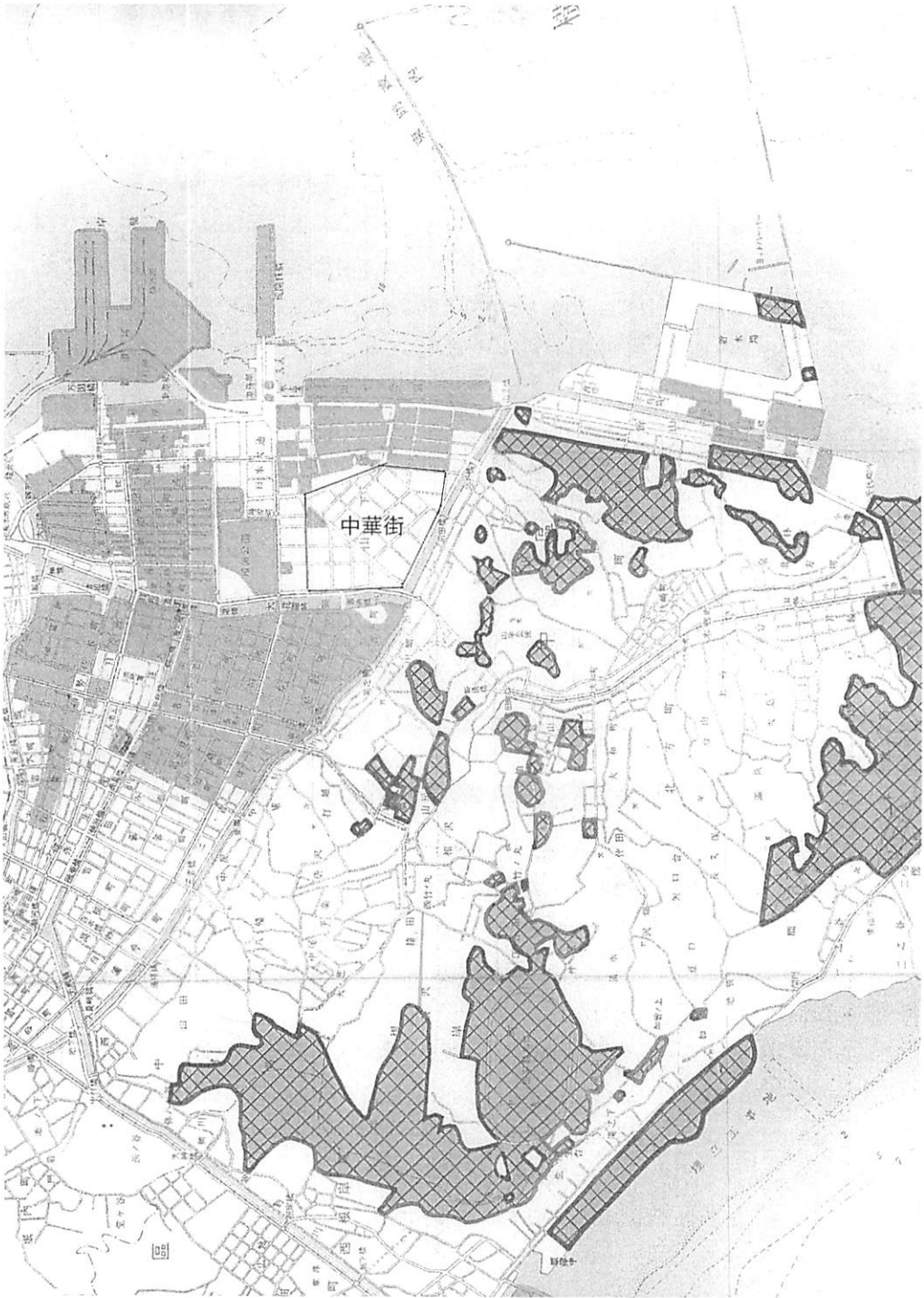


図1 戦後横浜接収区域と中華街（『横浜市史 資料編7』横浜港隣接地帯接収現況図（2000））  
（褐色部分：接収地，網掛け褐色部分：接収住宅地）

とあるように中華街の華僑はGHQと密接なつながりがあった。中華街が「リトルアメリカ」の中心にあったことが、戦勝国民扱いだった華僑の立場をさらに優位にし、中華街の復興に大いに役立った。

当時の住民の証言として「復興のめざましかった山下町には、食料を求めて日本人が殺到した。売上金は、いちいち数えていられないほどで、四斗樽に日本紙幣は無残にも投げ込まれた。投げこんで置いてかさ張ると足で踏まれた。どこの店もどこの店も繁盛した。これをいつも見ていた私は、胸のなかに敗戦の悲嘆がこみ上げてくるのが耐えられなかった。」<sup>3</sup>とあるように、中華街は横浜最大の闇市として、市民にとって食欲をそそり満ちた場所であった。中華街には約300軒に近い中華料理店が軒を並べ、寿司やどんぶり類、また、うどん、そば、飴菓子などを販売していたため、職を求めてあつまる人々のために大賑わいを呈した<sup>4</sup>。

1947年1月当時、神奈川県在住の中国人は2,328名で、その7割以上が中華街に居住していた。しかし、終戦直後の中華街は闇行為が横行し、闇物資を利用した料理店や繊維製品の販売を営むなど異常な活気を呈した。なかには戦勝国民としての意識を強く持ち敗戦国の法令などには従う必要はないとして、不法建築・無許可営業・土地を不法占拠する者などもあった。

したがって、当時の中華街では、経済事犯、刑事事犯、民事事犯等が頻発したが、当時の日本警察の立場としては、これら不法事犯に対して強硬な態度をもって臨むことは極めて困難であった。その原因の一つが、犯罪の法的取り扱いが明確でなかったことにある。中華街の中国人、台湾人だけでなく川崎、鶴見に多く居住していた朝鮮人についても同様であった。終戦直後、朝鮮・中国・台湾人の犯罪の取り扱いに関しては終戦直後は明確にされていなかったが、1946年2月19日、GHQから「刑事裁判権の行使」についての覚書などが発せられ、法権の所在が明らかとなった。すなわち中国人は連合国民として連合国軍が法権を有し、朝鮮人は「解放せられた国民」であって連合国人には含まれず、一切の日本法令に服するを義務を持ち、台湾人は「将来変更されることあるべきもそれまでは朝鮮人同様の立場に置かれて可なり」とされた。内務省警保局はこれに基づいて1946年3月2日、刑事裁判権等の行使に関する件などの関係指令を全国都道府県に対し通達した。

これらの法令に基づき、進駐軍の治安当局は強力な取締り実施計画を策定し、日本警察と協力して重点的取締りを実施したが、かれらの治外法権的意識を払拭するにはなかなか至らなかった。大陸に国籍がある者は、連合国民として連合国軍が法権を有するという点が日本の法令、警察に対する態度に幾許かの影響を与えたことは否めない。また台湾人も「将来変更されることあるべきも」一切の日本法令に服する義務を持つというやや不安定な位置づけが影響を与えていたとみられる。

中華街の豊富な物資は、中国人が米軍のPXから購入してきたものに止まらず、米軍からの

<sup>3</sup> 『横浜・中区史』(1985) p.344

<sup>4</sup> 『加賀町警察のあゆみ』神奈川県加賀町警察署、(1982) p.211

非合法的な横流し、さらには組織的な密輸によるものもあった。また豊富な資金に支えられて、日本国内の闇物資も大量に流入した。日本人の中に闇のリングを貨車一両分ほど買い、それをそのまま中華街の商人に売却するなどの者たちが出てくるなど、闇物資の流入先としても中華街は存在感を示していた。野毛町など、日本人が中心の闇市には警察が一斉取締りを行い、闇物資の摘発や公定価格での販売を指導したが、戦勝国民である中国人が多くを占める中華街に対しては、日本の警察は及び腰にならざるを得なかった。

野毛の露天街も夜になると米兵の発射するピストルの音が聞かれ、殺人・強盗・ひったくりが横行したが、中華街の無法ぶりはそれを凌ぐものであったという。1946年1月2日の『神奈川新聞』は「夜ともなれば別せかいが展開すると言ふ、あゝ到底我々の足向ける場所ではない。」と述べており、当時の中華街は日本人が簡単に足を踏み込めるような場所ではなかった。けれども、こうした中国人たちの中にあっても、一部の有識者間には、日本に在留する以上、日本の法令に従うのは当然であるという意見を持つ者がいて、その意見に従って法令順守の気配も出始めていた。

強く取締れない日本警察に代わって、米軍の強力な指令が出され始めた。1946年9月12日の『朝日新聞』に「横浜の中華街 露店に閉鎖命令」として

「十日附で横浜中華街の露店は閉鎖すべき旨横浜地区米憲兵司令官カスティール大佐からの命令があった。同地区は露店指定地区ではないにも拘らず終日日華両国人により露店が営まれ、相次ぐ粛清も実質的には効力をあげず、今回の閉鎖命令となったもので、問題の露店はすでに十日から姿を消している。」

さらに1946年10月2日の『神奈川新聞』に「中華街を抜き打ち、モグリ露店も封殺」として

「九・一〇旋風で粛清された中華街の青空市場はいろいろな意味で注目されてゐたが、最近またまた関係当局の嚴重な監視網を巧みに抜けて、主食糧品はじめ禁制品、生鮮魚介類、青果物類を不正販売する不心得者があるので、所轄加賀町署では県経済防犯課に連絡し、とくにMPの協力をもとめて一日早朝、青空市場の禁止区域中華街を中心としてモグリ露店の抜打一斉取締を行った。この網にかかったものは青果物十名を筆頭に、米穀四名、繊維製品三名、鮮魚、雑貨各二名計二十一名を数へた。検挙された中には九・一〇粛清後、関係当局の監視取締網を尻目に、早朝または夕刻ごろを狙って常習的に不正販売してゐた不届□もあり、これら悪質者は厳罰主義で送局する方針である。尚県経済防犯課は同様の不正販売が他にも行われてゐるとの投書や風評もあるので、直ちに関係各署に指令し監視取締を行ふやう督励した。」

とあるように露店の取締りが度々行われた。

1947年7月1日、GHQ から公布された政令118号飲食営業緊急措置令は、営業許可の厳密化、闇物資の使用、横流しの禁止をはじめとする様々な禁止に関する通達であった。具体的な取締りは日本側の報告に基づきアメリカ軍の軍政部が行った。アメリカから優先的に行われている

援助食糧の横流しや禁制品であるゴム製品、タバコ、繊維製品などが厳しく取締られた。問題は中華街の秩序の混乱にまぎれて不当利益を貪ろうとする日本人が少なからずいたことだった。彼らは中国人の名義を借りたり共同経営の形式を取るなどして暴利を貪っていた。この措置令の実施にともない、措置令に違反してでも営業を続けようとする者や、GHQや米軍第8軍神奈川軍政部に押しかけて実施反対の陳情を連日繰り返す者が出るなど、中華街は不穏な空気に包まれた。しかし日本警察には力はなくともGHQおよびアメリカ軍軍政部の権力は強く、その方針には抗しがたく従わざるを得なくなっていった。名義借りなどで闇利益をあげていた日本人たちの摘発も進み、華僑総会もGHQの方針を尊重する方向で中国人全体の指導にあたり、少しずつであったが経済事犯関係は少なくなっていった。また1947年には外国人登録令が施行された。

終戦直後の中華街の復興は料理業を中心になされた。これは上述のとおり、戦勝国の一員として中国人に対して食料などが優先的に配給されたからであり、食料不足の当時としては横浜で最も食にありつける場所であった。1949年初頭の中華街は、料理店が百数十軒、洋品店二〇軒、魚屋七軒、八百屋二軒、靴屋三軒、それに若干の雑貨商が交じり、総人口五〇〇〇人に達していた<sup>5</sup>。現在の中華街の規模の大きい中華料理店はこの時期に復興と資本蓄積を行ったものが多い。

1948年の7月21日の『神奈川新聞』に「第三人にも適用強化 電力面の治外法権を一掃（中華街等）」とあるように、戦後電力の使用量に関して、中国、朝鮮籍の人々について制限はなかったが、日本国内一般と同様、一定の電力使用制限に従うこととなった。また1948年7月31日の『神奈川新聞』に「横浜華僑も協力的 第三人への課税決まる」とあり、中華街在住の中国人も日本の法律に従い納税に協力することとなった。このように経済生活上の治外法権的地位は中華街から次第になくなっていった。しかし接收施設の返還などの周囲の「リトルアメリカ」状態が解除されていくのは、朝鮮戦争が休戦となった1950年代前半ごろからで、そのころまでは終戦直後の環境が続いていた。

## 2. 犯罪と中華街

ここで当時の中華街の特に犯罪事犯を見る場合、米兵、米軍関係者を中心とする進駐軍関係者が関与したケースも少なくなかったとみられる。表1は1945年8月から1947年1月までの間、神奈川県全体で発生した進駐軍人によってひきおこされた犯罪のうち重要事件の発生ならびに検挙状況である<sup>6</sup>。

<sup>5</sup> 『横浜市史Ⅱ』 第二巻下 (2002) p.231

<sup>6</sup> 『神奈川県警察史』 下巻 神奈川県警察本部 (1974) p.383

表1 進駐軍関係犯罪種別統計

犯罪種別	発生件数	検挙件数
殺人	20	8
強姦（未遂を含む）	96	13
強盗	1965	66
傷害	193	16
警察官被害	120	9
計	2394	112

表1でもあきらかなように、進駐軍人による犯罪の検挙率はわずかに5%にすぎなかった。占領下においては、これらの犯罪に対する裁判権、捜査権はなかった。中華街で米軍将兵による傷害事件がおこってもMPが逮捕、処理することが多かった。進駐当初は強盗、および強盗に伴う傷害事件が多かったが、次第に飲酒による傷害事件が増加した。その背景には進駐の長期化による精神的苛立ち、不安定があったとされている。その飲酒の中心的な場所の一つが「リトルアメリカ」の真只中の中華街であった。しかし当時、進駐軍関係者の犯罪については報道規制がしかれていたといわれており<sup>7</sup>、実際、当時の新聞記事に進駐軍関係者の犯罪記事は極めて少ない。

この時期、中華街関係で犯罪記事が載るのは、麻薬関係が多い。麻薬、覚醒剤並びに風紀事犯はなかなかなくならないだけでなくむしろ増加する傾向がみられた。終戦直後は横浜全体で覚醒剤の乱用事犯が多かった。これは、戦時中、軍需工場での不眠不休の作業に、あるいは特攻隊員のために軍用品として生産されていた覚醒剤が終戦になり大量に放出されたことが原因といわれていた。麻薬事犯は中華街に端を発していることが多かった。

【神奈川新聞】1951年4月14日に「中華街に巣くう麻薬密売団検挙 神静二懸で商取引 犯罪の裏に躍る朝鮮娘」として横浜市中区山下町一三六の新光ホテルで麻薬を密売中の台湾人とその手先の朝鮮人の少女を検挙し神奈川、静岡にわたる密売ルートが判明した。また【神奈川新聞】1951年10月11日「中華街アヘン窟急襲 十一名の常習者捕まる」によると

「中華街にアヘン窟があることを知った神奈川県麻薬事務所は、地検総指揮の下、国警、横浜市警の協力によって、十月九日夜九時に、山下町一五一の無職林釣拳、同町一六四の無職陳景援、同町一四八の無職伍有勝の三カ所を急襲し、同所でアヘンを吸っていた、英船カファリストン号水夫長石米および横浜中華街の華僑ら十一人を現行犯で検挙し、アヘン八〇グラムと吸引具を押収したとある。」

また中華街を管轄する【加賀町警察署のあゆみ】によると<sup>8</sup>、横浜中華街を中心とする麻薬密売団を内偵していた加賀町署は1952年8月14日夜9時半ごろ、制・私服警官46名を動員し、本拠とみられる山下町151大同クラブ（中華・台湾人構成）を急襲して中心人物とみられる東京都

<sup>7</sup> 栗田尚弥「米軍基地と神奈川」有隣新書（2011）pp.146-147

<sup>8</sup> 【加賀町警察署のあゆみ】 p.214

中野区西町16根岸勝造方中華人C (28), 中区山下町150貿易商S (31) ら30名を麻薬取締法, 外国人登録令違反, 賭博の疑いで検挙, うち20名を留置するとともにヘロイン10g, 注射器, 賭博道具, 寺銭1万5千円などを押収した。調べによると, 同クラブは30坪の平屋建で三方に出入口があり, 室内には吸引室, 賭博室, 麻薬調合室, マージャン室などのほか用途不明の小部屋2室があり, 組織的な麻薬の秘密取引所とみられた。更に, 賭博なども盛んに行われ, 中国人, 台湾人, 密入国者が常時出入りしている点などから国際的な麻薬団の疑いも深かった。中華街には麻薬の秘密取引所があった。

1953年9月29日の『神奈川新聞』によると「大麻煙草を売り捕る 麻薬にかわる新しい傾向」という記事で

「加賀町署は, 南区真金町1-6無職山本一夫 (21) を大麻取締まり違反の疑いで検挙するとともに家宅搜索した。調べでは, 同夜中区尾上町キャバレーオリンピック付近で大麻 (インド原産の麻薬の原料) をきざんでつくった煙草5本をもって駐留軍兵士に1本200円で売っていたもの。山本は拾ったといっているが, 先月キャバレーで便所内で化粧袋に入った大麻のたばこ30本が発見されたことがあり, 同一グループのしわざとみて追及している。大麻製の煙草は一名マリファナ煙草ともいわれ, 原料も野生しているところから最近使用者が増加する傾向にあり, 1本200~500円で売られ, 使用者は駐留軍に多いといわれる。同署は今後, 麻薬 (ヘロインなど) にかかわるこの種の煙草が広く出まわるのではないかとみて, 警戒しているが, 県下で検挙されたのはこれが始めてである。」

とある。終戦後, 横浜港は麻薬密売の拠点となっていた。主な流入先は香港港で, 香港の麻薬取引の中心であった九龍塞城に集められたものが多かった。この当時の九龍塞城は, 麻薬売買を中心とした三不管的狀況にあった<sup>9</sup>。1955年3月26日『神奈川新聞』には「中華街で麻薬密売取引現場襲い六名検挙」とあり, 京浜地区の中国人相手に麻薬を密売していたグループが中華街で麻薬取引の最中, 検挙された。

1956年の加賀町警察署の管内報告によると, 「管内は地域的には, 横浜港に隣接している国際色豊かな中華街を有しているので, 駐留軍人関係及び一般外国人関係 (特に中国人) による関税法及び外国貿易, 同管理法違反事件が多く免税品の譲渡, ドル売買不正所持等の検挙が他署に比較して多い傾向にある。また麻薬事犯は中国人が多く居住している管内において取引が行われており, その動向に注目し検挙に努めた。」<sup>10</sup>とあるように, 横浜港の接收された各施設の返還が行われ貿易港としての機能を取り戻し経済成長とともに日本有数の国際貿易港として発展し始めた横浜港に隣接した中華街は, 駐留軍 (日本の独立後は進駐軍は駐留軍と呼ばれるようになった) 関係, 外国人関係, 及び麻薬関係の中国人による犯罪が多かった。朝鮮戦争後も終戦直後とさほど変わらない治安状況が窺われる。1958年に横浜港に入港した内外船舶5300

<sup>9</sup> 森勝彦「香港九龍塞城の三不管地空間」国際文化学部論集第16巻第3号 (2015) p.216

<sup>10</sup> 「加賀町警察署のあゆみ」 p.221



隻のうち密輸容疑船として警察がマークしていた船舶は、696隻だった<sup>11</sup>。

1964年については「麻薬事犯については、強力な取締りにより、表面的には影をひそめたが、ますます潜在化し、巧妙化の傾向が強くなり、しかもその大半が中華街と何らかの関係をもっており、麻薬犯罪前歴者、刑務所出所者等23名の調査を行い、その実態は握と対象者の検挙に重点をおいている」<sup>12</sup>とある。

中華街が麻薬取引の拠点の一つとなったのは、中華街が当時東アジアにおける麻薬取引の中心であった香港との関係が深かったこと、即ち、香港からの移民が多く横浜港自体が香港からの貿易船が多かったこと、横浜港に来る外国人船員の飲食の場であったこと、「リトルアメリカ」の真ん中にあり米軍将兵の飲食の場でもあったこと、外国人船員や米軍将兵を通して麻薬が流入したり、彼らが顧客でもあったことなどが背景としてあげられる。特にこの時期の香港の九龍塞城は麻薬取引の中心であり、香港—横浜の貿易関係を通して流入する例が多かったとみられる。

この後も1966年については「凶悪事件は中華街を中心として駐留軍兵士又は外国人を相手とするところのバー等の飲食店が100数店舗あるため、飲酒による駐留軍人等による凶悪事件の発生が多く、凶悪事件発生数の3分の1を占めた。」とあり駐留軍人等による凶悪事件が多い状況は1956年の状況、さらに終戦直後の頃さほどと変わらない<sup>13</sup>

また1968年について「麻薬関係事犯は、強力な取締りによって表面的には全く影をひそめた感があるが、内面的には種々の情報があり、特に管内の特殊事情から不良外国人及び船員等が、中華街を中心に販路を求めている等の情報があるため、管内居住麻薬前歴者、刑務所出所者等の実態動向の把握とともに情報収集活動を推進し、捜査した結果、大麻取締法違反11件9名を検挙し、県下第1位の実績であった。」<sup>14</sup>とあるように麻薬の取引の場所としての中華街の役割は変わっていない。

横浜周辺に米軍基地や住宅地が存在し、横浜港における海外貿易が進展している限り、横浜港の歓楽街として中華街が機能する限りにおいて、麻薬取引の根を絶つことが難しい状況にあった。麻薬関係に事犯は中華街だけでなく、駐留軍居住区があった本牧をはじめ横浜全域にみられたが、麻薬の有力な取引場所として中華街があったことは確かである。その原因としては、駐留軍の兵士や船員が最も頻繁に出入りしていたのは中華街であり麻薬の購入者が最も集まる場所でもあった。

<sup>11</sup> 田中健之『横浜中華街』中公新書ラクレ（2009）p.146.

<sup>12</sup> 『加賀町警察署のあゆみ』p.232

<sup>13</sup> 『加賀町警察署のあゆみ』p.223

<sup>14</sup> 『加賀町警察署のあゆみ』p.233

### 3. 中華街の歓楽街化

終戦直後の中華街は闇市を中心として料理店、食品関係の業種が盛んであったが、1950年朝鮮戦争が始まると中華街は大きく変わった。その当時の中華街については

「ただね、その頃のこの街はね、まだまだ料理店は少なかったんですよ。外国人バーが圧倒的に多かったし、風紀も乱れてた。当時の日本人は怖かったんじゃないかな。戦争で負けたし、アメリカ人や中国人はたくさんいるし。僕が小学生時代だから、1950、1年頃ね。料理店は街全体で十五軒、あるかないかでしたよ。だって西の延平門から入って、いま横浜大飯店があるところはお汁粉屋さんだったから。それで、その隣が薬屋で、玉突き屋があって、その隣りがバー。で、うち萬珍楼、華勝楼。で、その先に行くと、牛乳屋があって、国民党の事務所があったりして、表通りは普通の町だったよ。裏通りは、外国人バーが軒並み並んでいたけどね。」<sup>15</sup>

とあるように1950年代になると中華街に外人バーが急増した。これには1950年に勃発した朝鮮戦争により横浜が連合国軍、特に米軍の兵站補給基地、休養基地となり、兵士が中華街に繰り出すようになったからである。機を見るに敏な華僑にはバーやキャバレーを開き、大きな利益を得る者が続出した。これらのバー、キャバレーでは、アメリカの風土にあった音楽、ジャズが盛んに演奏されたりダンスが流行したり、一種の軍需景気が現出した<sup>16</sup>。

「僕が子供の頃の中華街、だから、1940年代、当時はまだ唐人街って親父たちは言っていましたけど、その頃の街は料理屋も少なく、裏通りに外国人バーがたくさんあって、客引きがウロウロしてて、夜の蝶の嬌声が響くっていう、夜の蝶なんて言い方は古いか、ホステスだね。そうですよ。客は外国人、それも米軍の兵隊。だから警察も日本の警察じゃないですよ。MPって、アメリカの警察が治安を守っていました。そうちょっと怖い街だったんです、ここらは。それでも、中国人がオーナーのいろいろな店が寄せ集まっていたね。」<sup>17</sup>

「ここが中華街の大通り。平日の夕方なのになかなか人通りがありますけど、私が若い時はこんなもじゃなかったですよ。それこそ、朝からアメリカ兵でいっぱい。そう、朝からですよ。体の大きな白人のGIや黒人兵で、この通りも裏通りも、町全体がふくれあがってましたから。いや、中華料理を食べるんじゃないんです。ここには、アメリカ兵たちの「外人バー」がたくさんあったからです。おおきな店では、「ブルーガーデンア」でしょ、それから「レッドシューズ」に「クラブクイーン」、「マンダリン」なんていう店もありましたね。ええ、この大通りにあったんです。裏通りは、もっとすごかった。小さな

<sup>15</sup> 林兼正・小田豊二『聞き書き 横濱中華街物語』集英社(2009) pp.76-77

<sup>16</sup> 『横浜・中区史』p.346

<sup>17</sup> 『聞き書き 横濱中華街物語』p.108

バーがひしめきあうように軒を並べて営業してましたから。店のオーナーは、中国人だったり、韓国人だったり、日本人だったりしましたが、ホステスはだいたい日本人でしたね。」<sup>18</sup>

とあるように1950年代前半の中華街は外国船の船員や駐留軍の兵士を相手とした外人バーを中心とした歓楽街としての色彩が強かった。元々、日本のバーの発祥地は山下町で、1860年、居留地70番地に日本初の洋式ホテルとして開かれた「ヨコハマホテル」の中に設けられたプールバーが、日本最初のバーであるとされている。「ミリオンダラー」「バンブー」「チェリーブロッサム」といったカクテルは横浜オリジナルのカクテルである。朝鮮戦争の頃の中華街には138軒の外人バーがあった。外人バーのオーナーたちは、中国人、韓国人、日本人とまちまちであったが、ホステスのほとんどは日本人であった。

横浜港に米軍の軍艦や輸送艦が接岸すると、日本人がマイクロバスで、米兵たちを横浜中華街へと連れていく。彼らは米兵相手の日本人娼婦を斡旋するポン引きで、外人バーからマージンを貰って米兵を店に連れて行くのである。外人バーは、朝七時くらいから営業しており、白人用の店、黒人用の店とはっきり分かれていた。外国船員や米兵は酒の勢いもあって、女をめぐって殴り合いをするなど、喧嘩が絶えなかった。そのためこの界隈はブラッドタウンとも呼ばれていた。また中国系、朝鮮系、日本人のヤクザも入りこんでいて、現在中華街で香港路と呼ばれる路地はポンコ横丁とって、人を連れ込んで殴り合ったり、恐喝があったりする通りの一つだった。

ベトナム戦争にアメリカが本格介入した1964年頃から米軍の全面撤退の1973年の間、横浜は再び米軍の補給基地、休養地となり、中華街の外人バーに米兵が溢れた。酒に酔った米兵のトラブルが絶えなかったので、SP (Shore Patrol = 海軍憲兵) という腕章をつけた米海軍の憲兵が見回りをしている一方で、腰に拳銃をぶら下げた酔った水兵が路地をうろついているという不気味な状況であった<sup>19</sup>。このようにベトナム戦争終結まで中華街は外人バーを中心として、かなり治安の悪い状況が続いた。

#### 4. 歓楽街からの脱却

朝鮮戦争が休戦になり米軍兵士が帰国し始め軍需景気が終了すると、中華街は新たに变化した。大通りにはこれまでのバーやキャバレーに代わって中華料理店が復活した。以前の中華料理店はあくまで、中国の、それも同郷の人たちのための料理を提供していた。その店に、たとえ日本人が来たところで、興味本位で、中国人が食べているものを食べるために来ただけだった。それが、中国人ではなく、日本人相手の料理店が次々と誕生したのである。本格的に日本

<sup>18</sup> 小田豊二『聞き書き 横浜物語』集英社 (2003) pp.83-84

<sup>19</sup> 田中健之『横浜中華街』中公新書ラクレ (2009) pp.150-151

人の好みに合わせた中華料理がつくられるようになったのは、1953（昭和28）年～1955（昭和30）年頃であった<sup>20</sup>。

また、その頃になると、戦後の日本人の生活も安定してきて、おいしいものを食べに行くという余裕も生まれてきたことも幸いしたかもしれない。ここで現在の横浜中華街の原型ともいえるべき、日本人相手に商売をするこの街の歴史がはじまったと言えよう。1952年には横浜港の大棧橋が接収解除となり、貨物船や客船の出入が多くなるにつれて、その人々のなかには中華街へ流れ込む人々もでてきた。本来の貿易港の機能と賑わいを取り戻した横浜港の繁華街として中華街は変化し始めた。

1953年11月25日の『神奈川新聞』によると「ハマ名物を昔に返せ 中華街・元町振興会生まれる」として横浜市、横浜商会、横浜華僑総会が中心となりかつての中華街、元町の賑やかさを取り戻そうという運動が始まった。1955年には中華街大通りの西側入口に中華街のシンボルとなる牌楼が設置された。戦前と異なり異国情緒を前面に出した街づくりが開始された。

図2は1956年当時の中華街の料理店と外人バーの分布状況である。主要な大通りまで外人バー、キャバレーが占拠していた状況から、大通りは中華料理店が中心となり外人バーは裏通りや中華街の周辺部に立地する状況に変化している。朝鮮戦争休戦後の外人バーの減少のなかで、中華街が次第に中華料理店を中心とした街に変化し始めたことが窺われる。

善隣門が建設されてから数年後の中華街については、1960年12月20日の『神奈川新聞』に「中華街の昨今」、サブタイトルに「戦前をしのぐ復興 総合歓楽地帯へ飛躍 最近では鉄筋デラックス店が続々と出現」と中華街の復興の状況を伝えている<sup>21</sup>。

「大通りに中華大門が建設されてからは急速に復興のピッチが上がった。この間、バラックが本建築にかわり、銀シャリのどんぶり物専門だった店も本格的中華料理を競うようになった。現在、大通りを中心に大小三十数軒が軒をならべているが、とくに、ここ二、三年は、有名店の拡張が相次ぎ、結婚式場を備えたデラックス店が続々出現した。中には鉄筋コンクリート五階建てという超デラックス店もある。」とあり、戦後の闇市的雰囲気を残していた状況から本来の中華料理店として現在につながる店が増え始めていた。この背景には高度経済成長が始まるなかで、庶民が本格的な中華料理を食べるようになったことがある。また「戦後の中華料理は味とともに見た目にも研究が加えられて、盛り方や色彩などにも現代人の好みにあいよう改善されたといわれている。」とあるように、日本人の好みに合うように改良されるようになった。

また華僑華人側の変化として「これらの人たちも時代の風潮にそまってきたのか、中華街の昔のエキゾチズムは失われ、魅力的な中国服婦人や、店頭にブタの頭をつり下げた肉屋というような中国色は見当たらなくなった。年中行事や風俗的習慣などもすたれて、国慶節や港まつ

<sup>20</sup> 林兼正「なぜ、横浜中華街に人が集まるのか」祥伝社（2010）p.66-67

<sup>21</sup> この記事の初見は『横浜中華街關帝廟』自在株式会社（2014）p.85

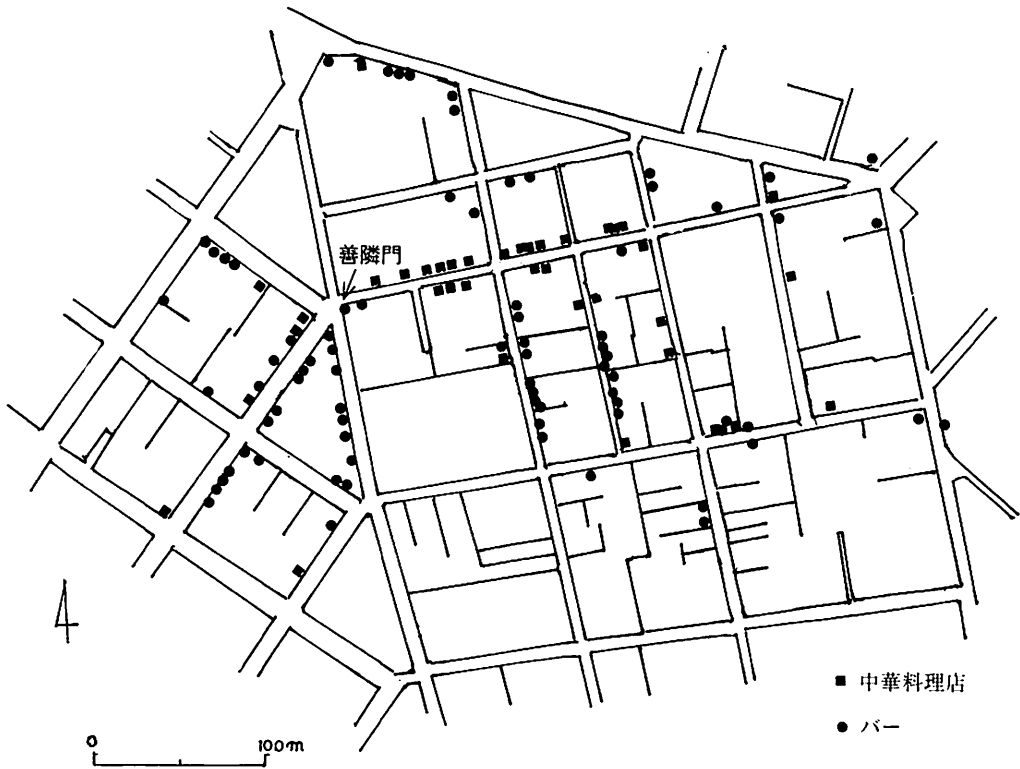


図2 中華街の中華料理店・バー分布 (1956年)  
 『横浜市経済地図 中区 明細地図 昭和31年版』より作成

り仮装行列にあらわれる獅子舞いのほかはみられなくなり、泣き男や泣き女の連れ添った中国の珍しい葬式行列など、ハマっ子の遠い思い出の中に消え去ってしまった。」とあるように戦前や戦後まであったチャイナタウン本来の中国風の習慣がなくなりつつあった。

また戦前と異なるのは、1949年中華人民共和国の成立にともない、子供たちが通う学校をはじめ横浜華僑は大陸系と台湾系に分かれたことである。しかし「一部指導者を除いては表立った思想的対立という、とげとげしさは見当たらず、華僑の大陸的性格を物語っている。」とあるように外部者からみた印象としては分裂まではいたっていないと述べている。この辺りは微妙なところで当事者にとってはそれぞれ複雑な思いがあったことが華僑の回顧談には多く出てくる。1952年には、横浜中華学校の国民党系の教員を共産党系の父兄や生徒が攻撃する事件が起り、中華学校は1953年に国民党系の横浜中華学院と共産党系の横浜山手中華学校に分裂した。1966年になると大陸の文化大革命の影響を受けたグループが国民党を支持する華僑の店のガラスを壊したり、国民党系の横浜中華学院の教師、関係者を攻撃する事件もあった。1950年代半ばから1960年代半ばにかけての時期を「失われた十年」という華人もいる。

「今後の課題としては、自家用車族の増加による駐車場問題が一番の悩みとなっているが、

最近、町の周囲に外人相手のバーが激増してして“本牧”なきあとの特殊地帯を作っているほか、近くにマリントワーも完成して、総合歓楽地帯としてさらに飛躍への条件を加えている。」モータリゼーションの進展に伴う駐車場の確保の必要性が出ているほか、中華街の周辺に急増した外人バーの問題が指摘されている。“本牧”は本牧の米軍住宅地域に隣接した地域で、チャブ屋という外人相手の風俗系の店が多数あったが売春防止法の成立以後衰退し、その代りに中華街周辺に外人バーが増加した。これらの経営者は日本人が多かったが、土地や店舗を貸したのは華僑、華人が多かった。歓楽街化することには華僑、華人側にも様々な意見、立場があり、統一されていたわけではない。

このような中、1960年代初めから世界の貿易物流のコンテナ化が始まり、従来の貨物船に代わりコンテナ貨物船が登場し、コンテナの積み下ろしに必要なガントリークレーンや広大なコンテナバースが港に必要になってきた。横浜港もコンテナ化への対応を迫られることとなった。1963年から建設が始まった本牧埠頭はコンテナ化対応を主眼とし、1966年には本牧埠頭にコンテナバース、552メートル3バースの設置計画が立てられた。そして1968年に本牧埠頭にコンテナ船第1号船としてアメリカの「プレジデント・タイラ」が入港した<sup>22</sup>。

以降、海上輸送のコンテナ化は本格化していくが、同時に貨物の荷役作業は大幅に合理化され、船上業務に必要な船員も少ない人数で事足りるようになった。コンテナ化の波とともに中華街に来る船員は減り始めた<sup>23</sup>。

このコンテナ港化が、横浜港だけでなく港町横浜、さらに中華街の大きな転換点になった。またベトナム戦争からアメリカ軍の撤退が始まり横浜の米兵たちも帰国を始めた。中華街の外人バーも次々と店を閉め日本人向けの中華料理店が増え始めた。

1972年の日本の中華人民共和国との国交回復は台湾系華僑に打撃を与えた。日中友好の機運が国内で高まり、中華街へ足を運ぶ日本人が増えていったが、中華街の華僑の対立は中々解消しなかった。両者の対立が解消し始めたのが1986年に炎上した関帝廟の再建であった。二つの華僑総会が話し合いの場を持ち、協力して再建事業に取り組むこととなった。ここに中華街が一つとなって新しい街づくりを行う土台が出来た。1955年の善隣門設立以来、30年が過ぎていた。

## おわりに

終戦直後の中華街は外部の人間からすると「治外法権」の場所としての印象が強かった。「戦勝国」としての中国人はGHQから食料、物資の特別配給を受け、中華街は闇市をはじめとする食料、物資供給の場所として賑わった。復興にあたって中華街は当初からGHQ、そして進

<sup>22</sup> 〔横浜港史 総集編〕横浜市港湾局企画課 (1989) p.609

<sup>23</sup> 菅原一孝『横浜中華街探検』講談社 (1996) pp.153-154

駐軍将兵と密接なつながりがあった。大棧橋をはじめ港湾施設の殆どを進駐軍に接収された横浜港は進駐軍の管理する貿易、軍需物資の取引に依存せざるを得ない状況にあり、中華街はそのような「リトルアメリカ」のど真ん中にあった。

横浜中華街は少なくとも1951年のサンフランシスコ平和条約による独立と日本政府による国内統治権の確立までは、地元行政、官憲側からすると管理が難しい場所としての性格が強かった。国家としてはいまだ承認されず、GHQの厳しい監督の元、代理統治者としての日本政府、警察は、戦勝国である連合国の一員である中国系住民に対して、強い態度で臨めなかった。その中国系住民も1949年の中華人民共和国の成立により大陸系と台湾系に分裂し対立した。さらに、朝鮮戦争時、横浜が米軍の補給基地、休養地としての役割を果たしていた時期の横浜中華街（当時は南京町）は、外国船の船員、米軍兵士用の歓楽街となっており、特にこれらの店が開店する午後9時以降は一般の日本人が気軽に立ち寄れる場所ではなかった。この時期は表面的には誰がコントロールしているのかがわかりにくい不管地的な状況であった。

そこには第二次大戦後の「戦勝国」、「敗戦国」としての関係、進駐軍の占領政策、日本の独立問題、国共内戦と中華人民共和国の成立、朝鮮戦争による米軍駐留増と横浜の補給基地化にまた影響され、対応したやり方であった。また朝鮮戦争後も高度経済成長を支えた貿易港として発展した横浜港の中での対応が総合歓楽街的な方向であった。現在、中華街の大規模な店舗はこの時期に資本蓄積を行った。否定的にみられがちな外人バー・クラブも、ジュークボックスやバンド演奏を通して最新の洋楽・ダンスを横浜に伝播させる役割を果たした。

徹底した日本人、観光客向けの店づくりになった現在の中華街は、東京ディズニーランドにも匹敵する集客力を持った集客施設となっている。誰でも気軽に行き楽しめる街になった一方で、老華僑には中華街に居住しない者が増加し店や土地を外部の者に貸して、その子供、孫たちは中華街を離れ別の職に就く者も増加した。借りた者には新華僑も少なくない。かれらは可能な限り短期間で利益をあげるために坪効率や回転率の向上を図り、廉価な食べ放題の薄利多売方式の料理店となったところが多い。これらの店の増加や中華街を離れて住む華僑華人の増加も中華街では基本的に肯定的に受け止められている。そこにはその時代の日本、横浜、そして国際の諸方面に対して自らを閉ざすことなく開放的に対応し自らを変化させてきた中華街の一貫した姿がある。戦後の「南京町」時代の姿もその一部であり、その視点から評価されるべきものだといえる。